夢

吉江孤雁

青空文庫

不圖昔の夢が胸に浮んで來た。

私は或る山へ登らうとしてゐた。禿山で、頂には樹木も無い。草花が所々懸崖の端に咲いてゐる。私の傍には二人の小兒が居た。一人は男の兒で六歳ばかり、一人は女の兒で四歳ばかり、男の兒は先きに立つて登つて行く、女の兒は私の手に縋つて歩いてゐる、不圖懸崖の頂の草花が目に入つた。

「あれ取つて頂戴な」女の兒は私に取りついて放れない。危いのを、右手で其兒を押へながら、身を曲めて、左手を伸ばし、取らうとすると、砂がほろ〳〵崩れて崖下へ落ちて行く。下は深い谿だ。底深く吹き上げて來る風に草花はゆら〳〵搖れてゐる。また、手を伸ばさうとする、が、一歩踏みはづせば其まゝ深谿へ落ちて了ふ。纔かに花を摘んだ。女の兒は悦んで其花を手にして登つて行く。

此山へ登るものは只私等三人より外に人が無いやうな氣がする、が、何人か、何人とも解らないが、私とは別れて別の途を行つた人のあるやうな氣がする。

途は下り坂になつた。凸凹の途に足が傷んでたまらない。見ると、脚下に遙か遠く、人家が立並んでゐる。薄曇の空は上から覆ひかゝるやうにしてゐるが、鐵色した塔の頂、白壁の家などが、歴々目に入る。私は立留つて眺め入つた。沈靜の色、何の物音一つ聞えて來ない。人家は並んでゐるが、其中に何人も住んでゐる人があるとも思はれない——途が少しづつ下る。と思ふと、私の傍を一人二人づつ、旅姿をした男女が通つて、傍目もせずに下つて行く。私も急いで降りようとしてゐると、後方から小足におりて來る人がある。一寸立留つて振廻つて見ると、少し隔つて若い女性がゐんでゐる。見覺えのある顔だな、と思つたが、其人は立つたまゝ動かない、おりて來ようともしない。何人だらう。私は二三歩後戻りした。「あゝ自分の妻だ！」胸の動悸は急に高まつて來た。如何様したのだ、一所に下りて行かう、と慫めると、視線を落したまゝ動かない。小兒等は俄かに泣き出した。

二人共自分に取り縋つて、哀れな聲で、「下りて行つて頂戴よ、下りて行つて頂戴よ」顔をば私の袖へ固く押し當てて離れない。妻は猶動かない。「一所に下りて行つたらば好いだらう、此先に休場もあるから」と云つても猶動かない、疲れたやうな顔色をして靜乎と立つてゐる。「後方へ歸りませう、如何様に嶮しくても、今迄の途なら知つてゐますから」たゞそれだけ、眼を閉ぢて動かない、冷たい風が下の方から吹いて來る。——今迄の途なら嶮しくても知つてゐる、此れから先きの途は如何なるとも判然らないと云ふのか。私は耐らなくなつた。同時に小兒等は大きな聲を擧げて泣き出した。

はつと思ふと眼が醒めた。

私には妻もなく子もない。何故夢に見た人が自分の妻であると知つたか解らない。不思議で耐らなかつた。其時の寂しさは、消えずにいつまでも胸に殘つてゐた。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆14　夢」作品社
　　1984（昭和59）年1月25日第1刷発行
　　1985（昭和60）年3月30日第2刷発行
底本の親本：「緑雲」如山堂
　　1909（明治42）年3月
入力：土屋隆
校正：久保格
2004年4月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夢

吉江孤雁

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/